

知るとともに、母に何もしてやれなかつたことを悔いでいる私である。

最後に戦死、戦病死された戦友のご冥福と遺家族の方々のご繁栄をお祈りしております。

(参考)

早足の歩幅は七十五センチ、一分間に百十四歩  
運命の別れ目

その一、一列は歩兵砲と重機関銃中隊要員。

その二、中隊にいたら戦死したかも。

その三、蒋介石直系の兵隊は強く、進軍ラッパを吹いて夜襲してくる。通信隊員も数名戦死する。

## 私の追録 入隊より復員まで

岐阜県 小池 隆 重

昭和十八年十二月四日、早朝、丸小根神社にて武運長久の祈願、小池隆重、杉山竹男と二人、北恵那鉄道

苗木駅より入営のため出発。

七人、小池隆重、小池光男、大山久、桜木健三、早川清、林正美、杉山竹男。挨拶代表小池隆重。

同年十二月五日、中部第四部隊（第六十八連隊）へ六名、中部十三部隊へ一名（杉山）。

—昭和十八年十二月五日—

中部第四部隊七中隊入隊。

同年十二月中旬、原隊出発、下関より関釜連絡船にて釜山へ。その夜は釜山公会堂にて仮眠。次の日汽車にて朝鮮を縦断して、満州を経て北支へ。新浦線にて、南京の対岸の浦口へ（この日は十二月二十七日ごろと思う）。

輸送船を待たが来ない。二隻の輸送船に六連隊、輜重、野砲その他を乗せて出発して行つた。

同年十二月二十七日、船が来ない、寒い、先に乗った者が羨ましい。南京の兵站にて仮眠する。

同年十二月二十八日、南京の港まで行くも兵站まで引き返す（十二月二十八、二十九日ごろ安慶と九江との間で三師団の十八年兵が乗った輸送船が爆沈されたとの噂が広まった）。

〔歩六追録〕によると、十二月二十八日午前十時頃、ノースアメリカンB25三機により、安慶の古塔の見える揚子江上で十八年兵外約二千名の乗った輸送船二隻が次々に爆沈された。生き残った者は四百名と記されている。

昭和十八年十二月二十八日より十九年一月下旬まで南京市内、中山陵など行軍と軍歌演習など一カ月近く駐屯する。

十九年一月下旬、南京港より漢口へ向かう、途中安慶の近くの揚子江に十八年兵の爆沈された船のマストだけが、痛々しく目に映る。

京漢線にて広水着、行軍にて応山へ、このとき、第六十八連隊第十中隊へ転属となる。

同年四月ごろ、一期の検閲が終わる第十中隊第一小隊第二分隊へ配属される。中隊長山田中尉、小隊長和田少尉、分隊長寛伍長、先任蟹江上等兵、そして下士官候補の五十嵐上等兵、山岸、近藤一等兵、小池二等兵、他。

—十九年五月中旬—

湘桂作戦のため、応山出發漢口へ、途中汽車の窓から住民の田植えをする姿が見える。去年までは俺もあして田植えをしたなあと、少し感傷的になる。数日後作戦行動、毎日行軍の連続。

—十九年五月下旬—

場所不詳、田圃の見渡せる丘の上で小休止。田の向こうの丘では、黄色く見える服装の兵隊らしき者が壕を掘っている。友軍の陣地だ、そう思いながら出發、軽機関銃を担いだ私は田圃の狭い道を小隊長を先頭に私と近藤一等兵と続いた。後の近藤古年兵殿が「小池、俺が軽機を担ぐ交代しろ」「まだ大丈夫であります」「遠慮するな交代しろ」「ハイ、お願いします軽機」といつて渡した。普通なら軽機が先になるのだが狭い田の畦道、交代して五、六歩進んだとき、パキパキパキ爆ぜるような音が耳をかすめた。「走れ敵だ」夢中で走った、田の土手にへばりついた。

瞬間、後を振り返った。近藤古年兵殿が目を吊り上げ恐ろしい形相で走って来た。フラフラとして片膝ついた。思わず駆け寄って抱き抱えた。「近藤殿大丈夫

でありますか」。右手がドロっとして生暖かい感じ、ガツクリした口から鮮血がほとばしった。ゾッとする寒気と畜生と思う怒りが私の全身に流れた。

「軽機、どうした軽機」小隊長の声に、すかさず五十嵐上等兵が近藤殿からもぎ取るようにして軽機を持って走った。走り寄った寛分隊長が「近藤を死なしてしまつた」と悲痛な声で叫んだ。水筒で末期の水を飲ます寛伍長、ダダダ応戦する軽機の音に我にかえつた。私はやつと近藤殿から手を放して軽機のもとに走った。初めての作戦である。初めて敵と遭遇した。初めて受けた敵弾、それが我が戦友近藤殿の心臓をぶち抜いた。しばらくして後の丘からドドドと、友軍の重機関銃の音がした。敵弾がこなくなつた。土手ずたいに近藤殿が運ばれて行く、膝上まである泥田の中を引きずられるように。

出発前に近藤さんが見せてくれたコートを着て少し笑みを含んだ奥さんの写真、大切そうに左のポケットへ、一旦入れた写真を右のポケットへ。思えば敵弾に、大切な奥さんの写真を汚さないように、そんな予感が

したのかなあ：そんな思いが一瞬私の脳裏をかすめた。  
— 十九年六月上旬より七月上旬まで —

近藤殿を失つた第二分隊の軽機関銃は、射手五十嵐上等兵、弾薬手小池一等兵のコンビとなつた。

夜も昼もなく続く行軍、毎日のごとく米軍機の機銃掃射、何回となく、繰り返される敵との遭遇戦、照りつく湖南の太陽、コレラと、赤痢に汚れた水、第十中隊でも何人かの戦死者が出た。負傷者も、病に侵された兵隊も後送された。小隊長の和田少尉殿が戦死された。同年兵の創生一等兵も戦死した。中隊の兵員も減つた。我が第二分隊も十二名で編制されたが今は五名となつた。

私も疲れた、夜行軍である。小休止「小池、今度は軽機を持つてくれ」「ハイ」渡された軽機を一旦は抱き抱えたが横に置いた、これが大失敗である。出発の声に私は歩き始めた後ろで「軽機が置いてあるぞだれだ」「小池、軽機を持つているな」「持つていません」「ナニ！」はじかれたように、五十嵐上等兵殿が取りに走つた。「馬鹿野郎、下士候のくせに軽機を忘れた

か」怒鳴り声でした。「申し訳ありません。自分が忘れました」と言つて咄嗟に取りに引き返すだけの気がうすれていた。

—茶陵方面に向かつて行軍—

小休止のある度ごとに野糞に行く私、下痢便だ、赤痢だ。「小池が大分下痢をしている、軽機を担ぐのを山岸に変えた方がいいかな」と、寛分隊長殿と蟹江上等兵殿の会話が耳に入った。私は「なに下痢なんかに負けるもんか」病気で入院するのは兵隊として一番恥ずかしいことだ。いつだったか、野戦帰りの先輩から赤痢を消炭で治した話を思い出した、それも竹の炭がいいと。

民家の竈を探した。炭化された炭がない。幸い戸外に竹を燃やした焚き火の痕がある。五ツ、六ツ、大きめの炭を上衣の物入れにしまった。ガジガジガジ、口の中でどろどろになるまで音がしないように嚙んで飲みこんだ、こんな日が幾日が続いた。下痢便が真っ黒い軟便にかわつた、元氣も出て来た。大休止のとき、指揮班の浅井曹長殿が、私を見て「寛伍長、小池の口

はどうした」トッサに私は、「湯で火傷しました」と答えた。實際その朝、誤つて熱湯で口のあたりに軽い火傷をしてヒリヒリしていたが、浅井曹長殿の目には、消炭でどす黒くなつた私の口元が異常に見えたのかもしれない。

—十九年七月十三日—

茶陵の街が見える。その手前に川が流れている(溪水)。その手前に綿畑があり、高粱が境界の区画をするようにはえている。

大休止、飯盒炊さんで夕食をとる。日が暮れた。泚水渡河である。綿畑の中を半分程進んだ時物凄い敵弾、今まで一度も遭遇しなかつた赤や青の曳光弾、「散開して伏せろ」横に散つて伏せた。「壕を掘れ、十字鉄も円匙も無い者は鉄帽で掘れ」その声には鉄帽を脱いで掘つた、夢中で掘つた。そのうち十字鉄がきた。掘つては鉄帽で土を掻き出した。どのくらい時間が掛かつたのかやつと全身遮蔽できる壕が掘れた。高粱と綿の葉で偽装した。一晚中頭の上を敵弾の曳光弾が飛ぶ。いつか見た故郷の花火のように。

—十九年七月十四日—

暑さに目が覚めた、喉がヒリヒリする。水が欲しい、「水を探しにいってくる」だれかが言った。偽装した高粱の幹を折って口にくわえた、もう水分も無い。だけれか自分が呼んだような気がした。五、六分経っただろうか、「五十嵐殿」呼んだが返事がない、「分隊長殿」やはり返事がない。「蟹江上等兵殿」念のため呼んだが声がない。百メートル以上も先に揚柳が見える、あの下には溝かクリークがあるはず、私はなるべく綿の葉を動かさないように匍匐前進、何度も何度も休み、柳の木の下の溝へ転がり込んだ。皆いたいた、心配して待っていた。顔を洗うふりをして水（泥水）を飲むだ。「ゴクゴクゴク」うまい。これが末期の水ともなってもよい、そんな気がした。

—涿水渡河—

陽が少し傾いてきた、十五時、作業小隊の兵隊が漕ぐ船底に身をひそめた。漕いでいた兵が撃たれて川に落ちた、助けることもできない。船底がザ、ザッと向岸に乗り上げた。すかさず船から飛び降りた私たちは

川の土手まで走った。先に渡河した第三小隊も動けずに土手にへばりついている。

李畑すもの向こうに白い二階建ての民家が見える。後で大隊砲の音が一発、二発。ドドド重機の音がする。敵の弾がこなくなった、交代して軽機を持った。「行くぞ」分隊長の声に李の樹の間を地を這うようにして走った。五、六十メートルも進んだとき、パキパキ、音と同時に右大腿部を焼け火箸で突き上げられたような痛みが走った。倒れたはずみに、弾袋の紐が左手と首を締め付けた。小銃が落ちた。右手を撃たれた寛分隊長殿が左手で拾って走った。

—茶陵の戦鬪にて右大腿部盲貫銃創を受ける—  
だれかが足を引っ張ってくれる、山岸殿だ、蟹江上等兵殿だ。窪地へ私を引っ張り込んだ二人は走り去った。間野兵長殿（衛生兵）が来てくれた。「小池を先に手当してくれ」自分の傷の痛みに耐えて部下の手当を頼む寛分隊長殿、すみません。

—大隊救護班から野戦病院へ—

昭和十九年七月十四日、茶陵の戦鬪において右大腿

部に盲貫銃創を受けた私は、大隊救護班から野戦病院へ、そして数日後湖南省攸県ウチの病院へ後送されることになった。何しろ七月下旬、苦力クツリに担がれた担架に容赦なく陽が照りつける、暑い喉が乾く。しかし俺は初年兵だ、我慢、我慢。そのとき、衛生兵殿が「こりゃ初年兵の干物ができる」と言いながら天幕で日除けを造ってくれました。有り難うございました。

喘ぎながら峠を登る担架の列、そのうち陽も落ちて薄暗くなった。小休止が終わって出発、しかし私の担架は地面に置いたまま、後ろから衛生兵殿が「何をしている早く行かんか」と走って来た。後ろを担いでいた苦力の姿がない。「畜生逃げやがったな、苦力頭お前の責任だぞ、お前担げ」仕方なく苦力頭は後ろへ回って担架を担いだ。

翌日攸県の病院へ。ここでもまた災難、這いずりながら用便をすまして病室へ帰ると、同室のどこの連隊か知らないけれど上等兵殿が、「貴様便所に行けるくらゐなら裏の南瓜を取って来い」「ハイ」私は落ちていた衣服を裂いて紐を作り、また這いずりながら南瓜

畑へ、三個紐でくくって病室の窓から引き揚げてもらって痛む傷をかばいながら、やっとの思いで病室へ。当然の権利のつもりで「自分も一つ頂きます」と生の南瓜を一切れ貰って食べようとしたとき、軍医殿の回診。

「南瓜を隠せ」上等兵殿の声に天幕の下へ隠した。しかし同室の古兵殿の隠したはずの南瓜が天幕の下に見える。すかさず軍医殿の目にとまった。「お前南瓜取ってきたか」「違います、もらいました」「何、もらった。だれだ取ってきたのは」軍医殿の声に仕方ない。「自分であります」「なに貴様か南瓜を取ってこられる者に担送の必要はない馬送に切り換える。直ちに荷物纏めて表に集合せよ」、軍医殿の命令である。隣の古兵殿が気の毒に思つてか「運が悪いなあ、気をつけていけ」と言ってくれた。

輜重隊の駄馬に無理に押し上げられた、傷が痛い。右手で鞍くらをささえ、左手にたてがみを巻きつけ落馬防おちま止。その行程はどのくらいだったか、さだかではないが、山道を越すと、衡山の病院へ着く手前、石の階段。

「落ちたら死ぬぞ」御兵の上等兵殿の声に夢中でしがみついた。半分少し登ったとき、左手に巻き付けていたたてがみが、ちぎれた。頭から後ろへ真つ逆様。

「馬鹿野郎」遠くかすかに聞こえた。だれかが抱き起してくれた。「大丈夫であります」朦朧とした頭で再び駄馬の上に押し上げてもらった。

やっと川岸に着いた。船が無いので大休止。同行の中の野戦重砲の少尉殿が「おいその兵隊、俺の所へ来い、俺の寝台で休め」「はい」少尉殿の厚意に私は安心して眠った。目が覚めると当番兵の上等兵殿が卯三、四個分のオムレツと粉味噌で作った味噌汁、その美味しいこと、私は汗と涙と鼻水のくしゃくしゃの顔で、むさぼり食った。こんな日が二、三日続いた、すっかり元気になったころ、船が微発できて川を渡った。出迎えた一つ星の衛生兵に「古兵殿大丈夫でありますか。自分の肩に手を掛けてください」と言われ、初めて古兵殿と呼ばれ、戸惑いながら病棟に向かった。

― 衡山の病院にて ―

病院では毎日何人か入院してきて、何人かが死んで

いった。スス竹を短く切ったものを肛門に入れられて検査があった。四、五日して私たち同室の二十六人は病院から二キロほど離れた民家に移された。同室の前日死んだ兵隊は、コレラ患者だったらしい。衛生兵も来ない。朝晩衛生曹長殿が棒の先に飯盒を三個くくり付けて食事を運んでくれる。箸もいらぬ、塩気もない、薄い雑炊掛盒に半分くらい、一口すすれば終わりである。

夜ともなれば食べ物の話ばかり。便所はない、隣の古兵殿がフラフラしながら用便に行く、今にも倒れそうになって、野糞である。心配して付いていった私の前でシャーと米の研ぎ汁のような、水溶便、話には聞いていた、コレラ菌だ。寒気と恐ろしさが私の背筋を走る。明日は我が身か。

何人かがリングゲル病棟とか言われる所へ移っていった。何人かが死んだ、遺体は茶毘にはできない。火をたけば米軍の機銃掃射に遭う。人差指と中指・薬指を切って包帯にくるんで衛生兵に渡す。夜、遺骨にするという。遺体はミカンの樹の間に埋めた。野犬が掘ら

なければいいが。

六人になった、一カ月以上もたったがだれも死なない。ある日、曹長殿が「お前たちも易俗河えいそくがの病院へ後送されることになった準備しろ」と伝えられた。ホツとした、死神から開放されてよかった。

―易俗河の病院へ（月日不詳）―

衡山から易俗河へ輜重隊のトラックによる後送である。二、三回米軍機の攻撃に遭うも無事、易俗河の病院へ。前線から多くの負傷兵と、病気で入院した兵が後送されてくる。十日くらいいただろうか、押し出されるように後送になる、行く先は漢口とのこと。

―漢口兵站病院へ―

小さな民船（ジャンク）に我々負傷兵四人と、中国人の船頭の家族三人を乗せた船は、易俗河を後に漢口に向かう。兵隊は絶対顔を出すなどのこと、米軍機に襲撃される恐れがあるかもしれない、とのこと。狭い船の中、中国人の船頭に話かけるも、船の操舵であまり応対もない。途中洞庭湖の中の小島で半日船を下りて手足を伸ばす。

また船の旅。幾日かして漢口が見える。六角堂はあ  
のあたりか、船が着いた。我々だけでなく、民船から、  
四人、五人と、患者の兵隊が下りてきた。衛生兵が迎  
えに来てくれた。漢口兵站病院へ着いた。白衣の従軍  
看護婦、半年ぶりの日本女性の姿は眩しいほど清楚で  
美しかった。

垢とシラミと血痕のついた衣服は、新しい下着と真  
っ白な病衣に換わった。「傷痍軍人」そんな言葉が頭  
のどこかに浮かんだ。食器で三食の飯、半年ぶりであ  
る。勿体無いような気がする。

―漢口兵站病院から武漢大学（陸軍病院）へ―

十九年十月ころより十一月に―

秋風が吹く。旬日もせぬうちに、冷たい風が変わつ  
た。私も武昌の武漢大学へ（大学全体が陸軍病院にな  
っていた）転送された。湖に囲まれた小高い丘の上に  
あった。蒋介石総統がアメリカより百万ドル借りて建  
てたと言われるだけあって立派なものだ、全館冷暖房  
である。

忘れもしない十一月三日、婦長殿が私を迎えにこら

れた。恩賜の包帯の拝領式である。婦長に連れられて  
広間へ行った。院長殿（閣下であったかもしれない）  
と軍医殿がずらり。戦傷軍人の代表として、将校一人、  
下士官一人、兵一人、階級順に伝達された。「陸軍一  
等兵小池隆重」官等級氏名を呼ばれた。「ハイ」私は、  
緊張でカチカチになって拝領した。一生に一度の名譽  
である。十二月二十五日症状固定により治癒退院。

—十九年十二月二十六日応山の残留隊へ復帰—

十二月二十六日、応山の残留隊へ復帰。昭和二十年  
の正月は応山で迎えた。十九年召集以下の初年兵は、  
教育隊で訓練を受けていた。残留隊では私が一番若い  
兵隊である。飯あげもした、使役もした。二、三カ月  
過ぎてクリークの柳が青い芽を出したころ、漢口に転  
進していた第三師団の参謀部へ転属になった。機密金  
庫の護衛である。中身は暗号書類とのこと。

二十年六月となり七月となった漢口の夏は暑い、こ  
んな笑い話がある。電線に止まった雀の足が焼けて落  
ちた、それを拾って食った猫が火傷したと。参謀部の  
兵隊はよく勉強していた。戦友の古兵殿、私より二カ

月前の召集兵で、年齢も十歳年輩で学歴も東大出の秀  
才、よく勉強を見て貰った。しかし体はあまり丈夫で  
はなかった。食あたりか、寝込んでしまった。しかし  
鉛筆だけは放さずになにか書いていた。私はそつとノ  
ートを見た。こんな歌がしるされていた。

「漢口の夏耐えがたく、水まぎく、

飯盒みずして、十日へにけり」と……。

—二十年七月下旬—

北支・新郷へ馬受領の命令が出た。参謀部、衛生部  
管理輜重で編制されて漢口出発。京漢線にて新郷へ、  
チョウコホウと言う部落へ着いた。ここでは支給され  
る食料は、米とうどん粉半々くらい、うどんを打つこ  
とを覚えた。

馬が微発できた。八月上旬馬を挽いて漢口へ向かっ  
て出発。黄河の鉄橋は長かった、軌道の間に鉄板が敷  
いてある。滑って落ちた馬が数頭黄河に消えた。何日  
か馬を挽いて行軍した。北支と中支の境にある信陽へ  
着いた。昭和二十年八月十五日である。

午後三時ごろだったか、師団司令部所属で同行の兵

隊が走って来た。「日本が戦争に負けた。アメリカに負けた」と言って走り去った。「ナニ、あいつ気が狂ったか、日本が負けるはずがない」と自分に言い聞かせた。しかし、事実だった。夕方輸送指揮の将校から正式に日本の終戦を伝えられた。何たる事だ。信じられない、信じたくない。

翌日、馬を警備隊に返納した。急いで汽車に乗った。漢口に向かつて、だれも喋べらない、話さない、ムツツリして、頭の中が真っ白だ。漢口へ着いた。参謀部の下士官から、我々第六連隊から派遣されていた兵隊は、原隊に復帰の命令が出ている事を伝えられた。申告もそこそこに民船に便乗した。周りは中国人ばかりである。連隊へ帰る兵三人と甲板の隅にかたまった。船が港に着く度に、警備隊へ、三師団がどの辺まで下がっているか聞いては船に戻った。

南京へ着いた。ここでは蒋介石総統が入城していて、日本兵は上陸させてもらえなかった。翌日鎮江へ着いた。警備隊へ連絡するため上陸した。向こうから曹長殿の引率した一個分隊ほどの兵に出会った。敬礼して

道を譲った。(後で知った、外の中隊から第十中隊へ配属になった前田曹長殿であった)。そのとき、「小池、小池じゃないか」隊列の内から声がした。見ると同年兵の幅上等兵の顔があった。

— 中隊復帰、鎮江へ —

第十中隊へ復帰した。兵舎は鎮江医学専門学校の校舎があてられていた。広いグラウンドがあった。海軍の砲艦「二見」の兵隊も一緒だった。終戦後の我々は相撲を取ったり、野球をしたりして昭和二十一年の正月を迎えた。仕立て屋上りの兵隊が、藁布団用の布をリュックサック用に裁断して配布された。一週間もかけて復員用にリュックサックを作った。

— 二十一年復員のため飯田棧橋より乗船 —

二月上旬復員のため、上海に向かう貨車に乗る。上海は呉淞クリークと、日華紡の激戦の弾痕が残る建物の近くにあった。ここで数日滞在した。

いよいよ復員のため中国大陸を離れる日がきた。昭和二十一年二月十八日飯田棧橋より乗船、サラバ上海よ。沖で一泊、狭い船倉も、食物の乏しいのも苦にな

らなかつた。東支那海を一路日本へ。

二十日の朝、だれかが日本が見えると言う、九州だ、博多だ。船を下りた、待ち構えていたように、DDTを頭に、背中に、ズボンの中に真っ白になるほど消毒された。通訳の腕章を巻いた日本女性がアメリカ兵の側に立っている。持ち物の検査が始まった。「OK」の手に手当り次第持ち物をリュックサックに放り込んだ。

復員列車が待っていた。客車である。夜中に広島を通過した。暗闇の中に、焼け野原が見える、その中に灯が二つ、三つ夜が明けた。京都も過ぎた。名古屋へ着く前に下りる兵隊の別れの挨拶がして、一路我が家へ急ぐ戦友の姿が見える。名古屋駅で別れを告げて、中央線の人となる。幅君とは、土岐津の駅で別れた。

中津川駅に着いた。改札口を出た暗がりの中に恵那山が顔に迫るように見えた。

時計を見ると十時少し前、終電車に間に合うかもしれない、北恵那電車の中津町駅へ急いだ、改札が始まっている、慌てて電車に乗る。山の田川駅で下りる。何

も変わっていない。

―懐かしの我が家へ復員、

二十一年二月二十一日 午前十一時―

暗い雪道を我が家へ急ぐサクサクと雪を踏み締めながら。二階建ての母屋も変わっていない。微かに明かりが漏れている。コンコン静かに戸を叩いた。「だれやえも」母の声が出た。「俺や、隆重や、今帰った」戸の門が開いた、母の顔、ひとすじの涙の流れるのを見た。

母が奥に向かって呼んだ。「隆兄が帰ってきたよ、みんな起きておいで」母の声に妹が起きて来て泣き崩れた。眠そうな目の二人の弟の姿、開け放された寢床に幼い男の子の寝姿があった。疎開中の従兄弟であつた。

〔追記〕

昭和十八年十二月五日中部第四部隊へ入隊した六人のうち、私以外の五人は、帰らぬ人となった。

## 【解説】

執筆者は第三師団歩兵第六十八連隊へ到着後、歩兵第六連隊転属。一期検閲が終わる早々の昭和十九年五月湘桂作戦に参加したのであるが、七月十四日熾烈な戦闘を経て重傷を負ったのである。したがって解説はその頃の湖南省茶陵付近の戦闘について記述をする。

七月二日、軍命令により第三師団は「主力ヲモツテ黄土嶺―攸県―安仁ヲ、有力ナ部隊ヲモツテ黄土嶺―茶陵―界首墟（茶陵南西三十キロ）道ヲ所在ノ重慶軍ヲ捕捉撃滅シツツ安仁ニ向カイ前進スベシ」の命を受け前進し、四日夜、安仁城外の掩蓋陣地を有する重慶軍約五〇〇を攻撃、一部は五日城内に突入。

しかるに師団主力方面で重慶軍の有力な部隊が新市東方山地を占領しており、茶陵方面からも一個師団弱、安仁守備の予備第一〇師団とともに攸県奪回の企図ありとの情報であった。

八日払暁から師団主力は第四十四軍に対し攻撃を開始した。しかし、重慶軍は頑強で九日朝に至ってもなお抵抗していたが、正午過ぎ重慶軍部隊を逐次突破し

ていった。十日早朝から師団は攻撃を続行、敵第一五〇師の二〇団は約四割の損害を受け南西に敗走した。

十一日、師団は一部で攸県北東地区の残敵を掃討させ、主力は夕刻茶陵付近から行動を開始して安仁南方地区に転進し、安仁周辺の重慶軍を包囲殲滅することを決定した。歩兵第六連隊（松山部隊）は十二日午後以来主力で嶧山（茶陵北四キロ）、一部で茶陵北方の重慶軍を涿水に圧迫するよう攻撃していた。

師団主力は十四日、茶陵付近で重慶第二十軍を包囲攻撃中で、同地南岸及びその付近になお有力な重慶軍が存在し、該地周辺の陣地に拠り抵抗していた。このため師団主力の安仁付近進出は十八日ころとなる予定となった。

安仁北東山地には約二個師の重慶軍があり、なお反撃を企図している模様との情報があった。第三師団は十六日以降、茶陵南方の掩蓋を有する堅固な陣地を南面して攻撃する意図をもっていた。

第十一軍主力の衡陽攻略が進展するに従い、師団当面の重慶軍の反攻も活発積極的となり、師団主力の茶

陵方面進出とともに各第一線部隊の戦闘は日を追って激烈をきわめた。重慶軍（当面の第二十、第四十四

初めの難関に遭遇した執筆者は、前述のような状況  
下で負傷を負ったわけである。

軍）は、兵力の優勢を頼み、戦意は旺盛で、時には攻撃に転じて我が第一線の直前まで前進して来たこともしばしばであった。十二日ころの師団は力戦奮闘して

攻撃を続行したが、戦局は意のごとく進展しなかった。

七月十六日、軍は第三師団方面に決戦を求め、師団長も承知した。茶陵方面では十六日払暁来、第六、第三十四連隊に同地南西高地の既設陣地に拠る重慶軍に対し更に力攻を命じた。しかしその抵抗は依然頑強で執拗なるのみならず、連日の激戦で重火器以上の弾薬ははや欠乏し攻撃は渋滞した。また十六日夕松山連隊長は頸部を負傷し野戦病院に収容された。師団主力は弾薬等を補充し、態勢を整え二十二日ころ攻勢発起を予定し、軍司令部に報告している。

このような苦戦は軍主力が衡陽を攻略するまでの八月下旬まで続く。衡陽攻略と共に第十一軍は南下し、十一月中旬、第三師団は第十三師団、北上した南支軍第一〇四・第二二師団と共に柳州を攻略するのである。